市会議長追悼のことば

1995 年 1 月 17 日午前 5 時 46 分、突然の激しい揺れがこのまちを襲い、私たちの日常は一瞬にして奪われました。あの日、あの時、私は兵庫区松本通にいました。燃えさかる炎が倒壊した家々を呑みこんでいく。昨日までとは違う現実に心が痛み、その光景は今もなお胸に深く刻まれております。

阪神・淡路大震災により尊い命を失われた方々、そして長きにわたり深い悲しみと向き合ってこられたご遺族の皆様に、心から哀悼の意を表するとともに、皆様が過ごされた日々の重さに思いを寄せながら、改めて祈りを捧げます。

震災後、私たちは瓦礫の中から立ち上がり、神戸のまちを甦らせるために不断の努力を重ねてまいりました。国内外よりいただいた多大なるご支援のおかげもあり、このまちは復興を成し遂げることができました。

しかし一方で、自然災害は今も日本各地を脅かしております。2024 年に発生した能登半島地震では多くの尊い命が犠牲となり、その後も青森県東方沖や山陰地方の地震などが相次いでおり、今なお各地で多くの方が苦しんでおられます。

私たちは、あの日差し伸べられたご支援の手に対する感謝を忘れることなく、各被災地に寄り添い、支援を続けていきたいと考えております。同時に、いつ再び起こるやも知れぬ自然災害に備えて、常に高いレベルで防災・減災の意識を共有し、ハード・ソフト両面にわたり強靭なまちの実現に向け取り組みを続けていかなければなりません。

あれから 30 年を超える月日が経ち、震災を経験していない世代が増える中、記憶を決して風化させることなく、経験と教訓とともに未来へとつなぐことが私たちの使命であることを確認し、命の尊さと絆の力を次の世代に伝えていくことを、改めて今ここでお誓いしたいと思います。

犠牲となられた方々の御霊の安らかならんことを心よりお祈り申し上げ、追悼の言葉といたします。

令和８年（2026 年）１月 17 日

神戸市会議長　菅野　吉記